

適性検査Ⅰ

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**8** ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は**四十五分**で、終わりは**午前九時四十五分**です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙**だけを提出しなさい。
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 6 **受検番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

東京都立三鷹中等教育学校

問題は次のページからです。

1

次の〔文章1〕と〔文章2〕を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には本文のあとに〔注〕があります。)

〔文章1〕

中学二年生の佐々木優希と荻野誠は、放課後、同級生で転入生の米倉愛のもとを訪れた。三人は外のベンチで、話している。

愛は一度深呼吸をすると、続けた。

「さっきも言ったけど、みんな違ってみんないい、はずなのにね。

学校って校則みたいに目に見えるルールよりも、同調圧力みたい
に目に見えないルールの方が、意外とやっかいだったりするかも」

「同、調、圧、力」

誠が区切りながら復唱した。優希が大きくうなづく。

「それぞれ違うことを考えていたり、思っていたりするはずなの

に、みんな意見を言わないよね」

愛は背中をベンチの背もたれにあずけ、続けた。

「こう言ったら、あの人になんて思われるとか、嫌われないか
とか心配ばかり。ま、自分がそうだったから分かるんだけど。

本当は、三十五通りの心があるはずなのに」

愛の言葉は、優希の痛いところをぶすりと突いた。

人にどう思われるか、いつも先回りして考えてしまう自分の心を、
見透かされているみたいだった。

「同調圧力があつたとしても、思ったことを、感じたことを、ちゃん
とすることが大切なんだね」

優希は胸に両手を重ねて、自分自身に言い含めた。

「透明なルールってさ」

「透明な、ルール？」

愛の言葉をなぞった。新たなワードが、心の中をすっと切り
開いた。何かをつかめそうな予感がする。

「ああ、同調圧力とかの、目に見えないルール。同調圧力は確か
にあるんだけど……」

愛はそこで切って、考えるように首を傾けた。

あるんだけど……？

優希はじっと、その続きを待った。

「透明なルールって、同調圧力だけじゃない、って今になって
思うんだ」

「どういうこと？」

思わず前のめりになってしまい、あわてて愛から体を離す。

「明星女学院のときに、日本ジュニア数学オリンピックを勧め

られたとき、目立ちたくないから、わたしは[※]頑なに断ったでしょ」

「うん」

「でもあれって、みんなの反応^{はんのう}を勝手に決めつけていたのかも知れない。透明なルールで、自分で自分を縛^{しば}っていたんじゃないかなって」

「ごめん、よく分からない」

「あのとき、もし、ジュニア数学オリンピックに出ようとしたら、[※]マーヤたちはひょっとして、いっしょに喜んでくれたり、応援^{おうえん}してくれたりしたんじゃないかなって」

「それはありだよ」

誠が相づちを打った。

「だからね、あのとき、同調圧力なんて本当はなかったかも知れない。自分が自分に作ってしまう、透明なルールに、縛^{おと}られていただけかも」

——自分が自分に作ってしまう、透明なルール

気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた。

愛が帰ったあとも、優希と誠はしばらくベンチに座^{すわ}っていた。

「この風景、なんか新鮮^{しんせん}だなあ」

誠が声をもらした。見慣れているはずの風景の、何が新鮮なんだか不思議だ。

「え、なんで？」

優希は誠の顔をのぞいた。

「僕^{ぼく}の家はこっち側だけど、橋をわたるとたいていは、そのまままっすぐ家に帰っちゃうんだよね。だから川を眺^{なが}めるときって、いつもなぜかあっち側からなんだよね」

「うんうん、荻野^{おぎの}くんのお気に入り[※]スポット、あっちだもんね」

優希が向こう岸に視線を向けた。

「だから、川は左から右に流れていたんだ。こっちから見ると、右から左に流れてる。あ、そんなのあたりまえか。自分で言ってる馬鹿^{ばか}みたい」

誠が自分の頭を[※]わしづかみにすると、優希は首を横に振^ふった。

「違うよ。あたりまえすぎて、誰^{だれ}も気にも留めないことを新鮮だと感じる、荻野^{おぎの}くんの感性が素敵^{すてき}なんだよ」

「いや、そんな……」

誠はもじもじしている。

優希は川の流れを眺めた。

川は右から左に流れている。同じ川でも向こう側から見れば、左から右に流れている。

もし川の中に立っていたとしたら、左右なんか関係なくて、川上を向けば川の流れに逆らうし、川下を向けば流れに押される。

川は変わらず静かに流れているだけなのに。

太陽が下流の方の住宅街の中に姿を落とした。住宅のでこぼことした影が、シルエットのように浮かびあがった。ひんやりとした風が、ふたりのうなじをなでていく。

(佐藤いづ子「透明なルール」による)

〔注〕

※ ワード——言葉。

※ 明星女学院——登場人物の「愛」が転校してくる前に通っていた中学校。

※ 頑なに——自分だけの考えや態度を強くもち続ける様子。

※ マーヤたち——明星女学院時代の愛の友達のこと。

※ スポット——場所。

※ わしづかみ——驚が物をつかむようにあらあらしく物をつかみ取ること。

※ シルエット——中を黒く塗りつぶした絵。

※ うなじ——首の後ろの部分。

【文章2】

要^{かなめ}（わたし）は、家の隣^{となり}に引越^{ひこ}してきたネパール出身のサリタと料理を通して仲良くなりたいたいと思い、友達^{ひかり}の光^{しょうかい}に紹介^{しょうかい}してもらった「がみババ先生」から料理を教わっている。ネパール料理の「モモ」に似ているギョウザを作ることに決めた要は、まずは基本のギョウザの作り方を教わることにした。

「あのっ、キャベツのみじん切りって、どうやるんですか？ 千切^{せんぎ}りはできるんですけど」

よし、と言うようにがみババ先生はうなずいて、キャベツを手にした。

「千切りしたキャベツを九十度横に向けて、また切るんだ。見せてやるから包丁を貸しな」

ととととと、一定の間隔^{かんかく}で刃^はがまな板に当たる。

料理が上手な人は、立てる音もちがう。とんとん何かを切るにしても、じゅうじゅう何かを炒^{いた}めるにしても、その手が刻^{きざ}むリズムが耳^{ここち}に心地いい。

まな板の上に、あっという間に薄緑^{うす}色の小山ができあがる。わたしもまねしたけれど、と、とと、ととと、音がつまずく。

がみババ先生のようにリズムよく切れないし、細くなったキャベツが床^{ゆか}に逃^にげる。

「速くやろうとしなくていい。そう、そのくらいの粗^{あら}みじんでいいよ」

「あらみじん？」

「みじん切りってのは三種類あるのさ。みじん切りが二、三ミリ角に切ること。粗みじんってのは三、四ミリ。ごくみじんは一、二ミリだね」

「その数ミリを使い分けると、何か変わるんですか？」

「もちろん。火の通る速[※]さも変わるし、食感も変わる。ものによっては風味[※]やにおいが変わるよ。そうだね、ちょうどいいからんにくで試^{ため}してみよう」

がみババ先生はにんにくを素早^{すばや}く二種類のみじん切りにした。

「片方^{かたほう}がごくみじん、もう片方が粗みじんだよ。ちょっとにおいをかぎ比べてごらん」

言われたとおりに、にんにくに鼻を近づけてみる。独特の、玉ねぎにも似た香りが鼻の奥^{おく}でふくらんだ。交互^{こうご}ににおいをかいでみると、

「あれ？ 少しだけど、ごくみじんのほうがにんにくのおいが強い気がします」

「だろう？ にんにくの香り成分はアリシン[※]っていうものでね。かんたんと言えば、こいつはにんにくを切れば切るほど増えるのさ。逆に、にんにくの風味は欲しいけどあんまりにおわせたくないってときは、切る回数を少なくする。覚えておくといいよ」

「はい。人に会うときとか、にんにくのおいって気になるし」

『源氏物語』[※]にも、そんな話が出てくるねえ。にんにくの薬を飲んだ女性が、おいを気にして想い人に会えないって」

がみ巴巴先生の知識は、食べものを始点にどこまで広がっているんだろう。その知識の一部をわけてもらうたび、わたしの世界も少しずつ広がるのが、楽しい。

野菜をすべて切り終えたら、キャベツとニラは塩を振^ふってもんで、[※]しんなりしたら水分をしぼる。具がべちよべちよにならないように。それからボウルに鳥ひき肉と野菜を全部入れて、塩こしょうと、しょうゆにお酒、ごま油を加えてさらにこねる。にゆる、にゆると指の隙間^{すきま}からひき肉が逃げていく感^{かん}触^{しよく}がちよっとくせになる。これでギョウザの具は準備完了^{かんりよう}了。

予想はしていたけど、具を皮で包むのに苦戦した。

「ただ皮ではさむだけにしてもいいんだけどね。でもあんたは、いかにもギョウザって形のものを作りたいんだろう？」

「はい。『モモ』っていう料理に見た目を似せたかったので、がんばります」

具をのせた皮のふちに水をつけ、ひだを寄せて包むのだけど、このひだがむずかしい。

「具をつめすぎだよ。それじゃお腹^{はら}が裂^さける」

「もっと細かくひだ作りなっ。ギョウザに見えないよ」

すかさずがみがみが飛んできると、指がいうことをきかない。

「あのう、コツってありますか？」

「こつこつやれ」

それ、コツかなあ。でも本当にこつこつと数をこなすうちに、不格好だったギョウザがだんだんましな見た目になってきた。

「そういやあんた、夏休みの宿題はやってんのかい」

「はい。ペースは遅い^{おそ}ですけど」

包み始めは無口になるけれど、手が慣れると口もだんだん動き出す。がみ巴巴先生とわたしはぼつぼつと話をした。先生が光ちゃんのお兄さんに料理を教えたときのエピソード[※]も聞いた。

「光ちゃんのお兄さんは、最初は卵^{たまご}も割^われなかったって本当ですか？」

「ああ、本当だよ。米だってきちんと研^とげなかったし、みそ汁^{しる}は

量を加減できずに鍋なべいっぱい作っちゃうし。でかいホットケーキを焼こうとして炭にもしたし。カレーに入ってる肉と魚の区別もつかなくて弟にあきれられて、必死にごまかしてたこともあったっけねえ」

「へえー。ふ、ふふふふ」

次々つぎつぎと出てくるおもしろエピソードに、わたしは何度かがまんで笑った。

「そういや、光の顔を最近見ないね。どうでもいいけど、あんたは連絡取ってんのかい」

「登校日に会いました。光ちゃん、悩みなやみごとがあるみたいで、ちょっと元気がなかったです」

「悩みい？ そりやまたどうして」

「部活のことらしいんですけど、話してもらえませんでした」

光ちゃんの後ろ姿すがたを思い出して、胸むねがちくりと痛いたむ。

「……たぶん、わたしが頼りたよりなくて、光ちゃんの役に立てないからがみババ先生は、やれやれと肩※かたをすくめた。

「あんたさ、『どうせまずくなる』なんて思いながら料理はしないだろう？ 人と人のあいだのことも同じだよ。悪いほうばかりにとらえてると、うまくいくものもいなくなる」

ギョウザにきれいなひだを作りながら、がみババ先生は話を続ける。

「だれかと友だちになるっていうのは、相手と一つの料理を作るようなものなんだよ。いろんな調味料や具材を足したり、ときには水で薄めたりしながら、二人がおいしいと思える味を根気よく探さぐっていくんだ。自分だけががんばるんじゃなく、相手だけに任せるんじゃなく、お互いたがに力を合わせてね」

「……はい」

「あんたたちはその真っ最中なんだ。ちょっと思いどおりにならないからっていじけるんじゃないよ。うっとうしい」

これは、励はげまされているのかな？

わからない。けれどしょうがを食べたときのように、おなかがいわつと温かくなる。

わたしと光ちゃんは、わたしとサリタちゃんは、今、どんな料理を作っているんだろう。

「ほれ、ぽけーっとしてないで手を動かしな」

「はい」

包んだギョウザは、今まででいちばんひだがきれいで、いい出来だった。

(落合由佳「要の台所」による)

〔注〕

※ ネパール——南アジアにある国名。

※ 風味——食べ物や飲み物を口に入れた時に感じる味わい。

※ アリシン——においのもととなる物質。

※ 『源氏物語』——平安時代に紫式部が書いた物語。

※ しんなり——やわらかくなった状態のこと。

※ エピソード——会話にはさむ短い話。

※ 肩をすくめた——肩を縮ちぢませること。

〔問題1〕〔文章1〕に「透明とうめいなルール」とありますが、これについて

本文には、二つの考え方が示されています。それぞれ二十字以上三十字以内でわかりやすく説明しなさい。

〔問題2〕〔文章2〕に「人と人のあいだのことも同じだよ。」と

ありますが、「がみババ先生」は、「わたし」と「光」の関係に対してどのようなことを伝えようとしたのか説明しなさい。なお解答らんにおさまるように書くこと。

〔問題3〕〔文章2〕に「相手と一つの料理を作る」とありますが、

このようにだれかと共に何かに取り組むとした場合、あなたはどのようなことを大切にしたいと考えますか。

〔文章1〕〔文章2〕の内容をふまえて、三百六十字以上四百字以内で説明しなさい。ただし、第一段落だんらくであなたが考える大切にしたいことを八十一字以上百字以内で書き、第二段落に、なぜそれが大切といえるのかの理由を書くこと。

〈きまり〉

○題名は書きません。

○最初の行から書き始めます。

○〔問題1〕では、段落だんらくを設けず、一まずめから書きなさい。

○〔問題3〕では段落を設け、一まずめを空けなさい。

○、や。や」や空白などもそれぞれ字数に数えます。

これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じまずめに書きます。

○。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「」で一字と数えます。